

文化論的転回と経済地理学の再構成

フィリップ・クラング*
(森 正人** 訳)

Philip CRANG

©Cultural turns and the (re) constitution of economic geography

Roger Lee and Jane Wills ed., *Geography of Economies*, ARNOLD, 1997, pp.3-15

本書 *Geographies of Economies* の最初のセクションに収められた章すべては、経済地理学もひとつの学問の下位領域であることを多様なやり方で主張している。このような主張が行われている現在は、経済地理学の位置づけも流動的なときであるが、この流動性はマルクス主義的な政治・経済的アプローチの思想的ヘゲモニーが起こった 1970 年代初頭から常にみられたのである。1990 年代半ばには、この伝統的な政治・経済的アプローチが守勢に立たされている。(政治) 経済地理学の内容、概念、アプローチすべてが、さかんに再考を迫られるようになったのである。経済地理学の内容としては、生活におけるどの社会的・空間的部分が経済的であり、どの部分(それがあればの話だが)が非経済的なのか、そして、これら経済的、非経済的領域が、いかに相互に関連しているのかということに関して再考されているのである。概念としては、階級、生産、労働、資本主義、もしくは経済それ自体といった重要な政治経済の理論的構築物の定義と有効性について、そしてそのような諸概念のリストを用いず、かわりにアイデンティティ、表象などの概念を用いることで注目される理論的関心の有効性について再考されて

いる。アプローチとしては、経済地理学者が重要であるとみなした経験的・概念的な現象を意味づけるためにどのような理論化と方法論が必要であるかと議論され、再検討されている。

経済地理学の性質が不確かである理由はいくつもある。実際、過去 10 年以上、近年の経済における地理の複雑な変化—とくにほとんどの「ポストマルクス主義」的批評家によって言い触らされる資本主義の「新たな」時間と空間—を解明することは難しかったため、経済地理学者は独立した問題関心のもと新しい領域を形成したり、またおりにふれて新しい思想的機略を探し始めたのである。より一般的には人文地理学がポスト構造主義、フェミニスト、エコロジカル研究といった多くのことに取り組んできたので、概念的にはそのような機知は利用できるようになってきた。そして政治的には、ラディカルな政治文化—それへの様々な程度の参与や申し訳程度の努力といったものが、左よりの政治経済地理学者たちを永く鼓舞してきたし、その存在を正統化してきた—では、解放のための階級闘争が政治・文化・環境認識の表象の政治学へと変化していったことをわれわれは目の当たりにしている。加えて、過去か

* ロンドン大学

** 三重大学人文学部

ら現在にいたるまで学問的な資本が生産してきたそれぞれの制度的な調査領域は、指導的人物に対する忠誠というよりは、思想的な刷新によってダイナミックに混ぜ合わせている。そして以上のような事態が、さらなる下位領域の形成を促しているのである。

こうした学問の刷新の形式は多様だが、このセクションにおける多くの章が示しているように、ある特定のタームがますます経済地理学の自己再構成を表象し、刺激すらするようになっていく。それが「文化論的転回」である (Crang, 1994b を参照のこと)。人文科学 (Chaney, 1994) や人文地理学 (Philo, 1991) の中でより一般的に記すと、学問の外側—ここでは突如、文化や文化的なものがそこで見られるようになった—と、学問の内部—それはとくに学際的領域の中心的存在であるカルチュラルスタディーズの出現による—の両方において知的認識を組み立てていく作業の中にこの文化への転回ははっきりと見られる。まさにデヴィッド・チェイニー David Chaney にとっては、この転回は「文化やそれに関係づけられた多くの諸概念が、これまで近代世界における生活をわれわれが理解してきたものを書き換えざるをえないような支配的なトピックとなり、かつ同時に最も生産的な思想的機知になっている」(1994:1) ものなのである。

もちろん、実際にはこうした転回は多様でせめぎ合っているものであり、個別の「新たな」経済地理学を引き起こすような唯一の「新しい」文化地理学学派 (Duncan, 1994) がないように、そして、何が文化で何が文化的なものであるのかということに関する統一理解がないように、単一の文化論的転回など存在しない。それでもなお、—多様な現実的あるいは概念的な外観では—文化は経済地理学の研究課題においてカギになっている。アンドリュー・セイヤー Andrew Sayer が *Society and Space* 誌の編集者記においてうまく示し、そして彼がこのセクションにおいて後に言っているように、「過去 10 年間のラディカルな学術的研究で最もはっきりとしていることは、経済から文化への移行である」(1994:635)。そしてこのことは下位領域としての経済地理学の位置づけに関する特定のジレンマを示していることも事実なのである。経済的なものと文化的なものは「自己」と「他者」として考えられ、それぞれは他者で

はないものとして定義されている。たとえば、イギリスの社会地理学内部における文化論的転回に対する最も興味深い解釈のひとつについて考えてみよう。Institute of British Geographers の社会・文化地理学委員会は社会地理学と文化地理学の「境界を定め、境界をはずす」マニフェストを出した (1991)。この議事録では、新しい調査領域の範疇が、「モラル・ジオグラフィーズ moral geographies²⁾」への関心の移行という流れの中で描き出されている。そして経済地理学に対置することで、モラル・ジオグラフィーズは非常に明瞭に位置づけられている。

全体として考えると、上述の議論は以前にまして世界の人文地理学をモラル (道徳性・精神性) という視角で見始めていることを示している。(中略) モラルという視角を採用し始めることは、それ以前の人文地理学研究的の妥当性を否定するということでは必ずしもない。(中略) まさにわれわれは、最近広がりつつある特定の視角—ネオ古典主義的な空間科学の経済学であれ、多くのラディカル地理学のような (自由な) マルクス主義的な政治経済学であれ、大部分は経済学的なもの—が、われわれのモラルという視角に対する「他者」を形成しているということを示したいのである。その他者は欠くことができない存在であるが、そのモラルという視角によって世界を見ることにより、修正されるものでもある (Committee of the Social and Cultural Geography Study Group of the Institute of British Geographers, 1991:17)。

経済地理学は社会・文化地理学から明瞭に区分されている。経済地理学はいわば「絶えず変化する資本蓄積によって決定される居住、土地、労働市場の経済学的側面」を通して、居住のセグリゲーションを理解しようとしてきたのだが、必然的に社会・文化地理学が分析するにちがいない「集団の編制やその空間的発現を生じさせるモラルというフレームワーク」を無視してきたのである (前掲)。このことは経済地理学という特定の領域の構造かも知れないけれど、実はそれほどめずらしいことでもない。倫理的なものや経済学的なものとの区分は、たとえば精神と物質、観念的なものと現実的なもの、生活世界と生活状況、もしくは象徴的な相互作用と道具主義的な相互作用などなど、多くの場面で用いられてきた二分法と同様である。ということは、もし経済地理学がこれまで文化地理学を対置させることによって、自らの特性を確立してきた—そして現在もそ

の特性を確立させている—のであれば、この文化論的転回を経ることは一体どのようなことを経済地理学の特性にもたらすのだろう。文化化された経済地理学では「経済的なもの」は一体どのようなものとなるのだろうか。この経済自体が文化に対してどのような効果を及ぼすのであろうか。

このセクションの章では、こうした諸問題をくりかえし検討する。ときにはこうした問題は真正面から衝突するし(Sayer, Peet, Masseyによってよりはっきりと示されている)、あるいは経済的なものの文化化を手がかりにして探求されることだろう(たとえば、Gertler, Watts, McDowell, Halford and Savage)。また別の論考は、少しばかり迂回してこの問題にアプローチしている。それらは、再構成された経済地理学においてどのように権力を概念化するのかという考察(Allen)、個別的政治経済的アプローチの根本原理の分析(例えば階級に関するGibson-Graham)、もしくはいかに経済的なものと「政治的なもの」とが相互に関係するのかという同じような問題(Painter)である。本章はこうした問題の導入部として、文化論的転回に対する経済地理学の反応を概略することによって、上記の多様なテーマへと向かう1つの道筋を示そうと思う。ここでは5つの点の議論によって、経済的なものと文化的なものとの間の諸関係について考えていこう。第一は、*経済的なものと文化的なもの*の敵対関係の継続、すなわち別個の領域であるとの認識の強化である。第二は、*経済的なもの*の文化的なものへの適用、つまり従来の理論的分析方法を文化的生活に応用することである。第三は、*経済的なものを、文化的なものに文脈化されたり埋め込まれているものとして理解*することである。第四は*経済的なものを象徴や記号や言説の文化的媒体を通じた表象として考えること*である。第五は、*文化を経済の物質化された部分として捉えること*(例えば、経済を、文化的な「物質」の生産・流通・消費に深く関わるものとして捉えること)である。このセクションの導入としては、私自身の概略的な図式をただ示すためにいくつかのすでにテキスト化された分析を強調すべきなのだろうが、私はこれらの様々な考え方や視点を通して前進していこうと思うので、本節におけるほかの章にも言及しているつもりである。というのは、これら

の章に対する私の注釈を読むことで、全ての見解に目を通さなくてもよいという事態にならないようにしたいのである。そして私は文化論的転回に関わっていく中で、経済地理学にとって一体何を「経済的」とすべきなのかということを考えるために、先立つ議論も引用しながら最後には結論を出すこととしたい。

1. 文化的なもの

もちろん、いわゆる文化論的転回に呼応する方法は、まさに転回している先にあるものにくるぶんでも左右されてしまう。だからわたしは、われわれがどのように文化的なものを定義しているのかということについて少し考えてみることから始めたい。文化的なものへの定義についてはレイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams の「英語で一番ややこしい語を二つか三つ挙げるとすれば、culture がそのひとつとして挙げられるだろう」(1983:87;邦訳 83)という考えを引用することがお決まり *de rigueur* である。それゆえ、たしかに経済地理学における文化論的転回への連想において、文化というものに関して様々な理解が生じてきた。だが、こうした理解は大きくは二つのタイプに分けられる。第一は、人間の生活の「総合的な」一面として文化を捉える理解で、これはある世界に意味を与えていく人間の能力と結びついている。ここでは、文化論的転回は意味や価値という経済にとっても重要な問題を取り上げているので、経済地理学に関係するのである。第二には、自身の意味体系や価値体系でもってそれぞれの社会集団を区分したりそれを構成していくというような、「示差的」性質として文化を強調する理解である。ここでは文化論的転回は、経済地理学者たちが行っている文化と経済的行動や規制との関連性の分析と関わっている。個人的には、人類学の文化概念に対するジョナサン・フリードマン Jonathan Friedman の批判的な再審議(1994)を参考にして、文化というものを、全ての人間が所有しているある事物としてではなく、われわれ全てが関係しているようなプロセスとして捉えるならば、私は第一の定義に同意したい。それゆえに文化的なものは、世界の意味深

長な地図化や、そこでの人々のポジショナリティに関わるものである。またそれは、アイデンティティ・意味・意味作用の諸実践に関わっており、こうした諸実践は、必ずしも審美的な記号価値の付与に対して閉じているのではなくて、同時に、常に意味の道徳的・倫理的属性に深く関わる可能性を持っているのである。さらに、この文化的な諸活動はある特定のレンズを通して生じるというよりも、まさに実践の問題として捉えられるのである。それゆえに、「文化（そしてわれわれの意味の地図）は、われわれが捉えようとするもの、テキスト、もしくは隠されたコードの外側にある何かではない。それ（ら）は、意味実践や、多様で社会的に状況づけられた属性の作用により作り出され、相対的に不安定なものなのである」（Friedman, 1994:74; 一部加筆）。

もちろんそのような文化的実践の結果、広範な人間モザイクにおける特定の一面を示すような、外観上は「異なる」諸文化や文化領域の産物となりうる可能性はある。そしてパム・シャーマー・スミスとケビン・ハナム Pam Shurmer-Smith and Kevin Hannam が上手く示したように、結果的には、「文化は単なるプロセスや事物であるだけでなく、（中略）それはしばしばあたかもそれが事物であるかのように取り扱われるプロセスなのである」（1994:79）。だから、こうした文化的諸事物は説明されなければならないというのは、まったくその通りなのだ。もっとも諸文化を諸事物として認識することは、決して分析的探求の目標地点ではなくて、出発点でしかない。こうした認識自体は、そして認識においても何も説明していないのである。

こうしたことから、経済地理学におけるあらゆる文化論的転回は、慎重かつ批判的な文化概念の展開を必要とする（経済的パフォーマンスを説明するために、国民文化・地域文化・有機的文化的観念を用いる危険性については、本書の後半章にある Gertler の論考を参照のこと）。しかし当たり前のことなのだが、われわれはこうした慎重的かつ批判的な展開が経済地理学にとってよいかどうか、そしてもし（少なくともいくつかの点で）よいのなら、いかにそれは展開されるべきか、を決めていかなければならない。

2. 経済的なものを文化的なものに對置させる

もちろん、経済的なものと文化的なものを對置させることで経済地理学の自己アイデンティティの純粋性を守り抜くという手段が、一潜在的かつ現実的に一文化論的転回に対して生じている反応であり、これにより文化論的転回に抵抗している。こうした對置は、これまで用いられてきた政治・経済的分析の強みを防衛したり反復することに根深く関わっている。そしてこのような専守は経済地理学者の実地研究に基づいて展開している。つまり、経済地理学者の関心事は、心象地理学よりもむしろ物質的現実性、テキストよりも社会的行為、言語よりも世界的なものである（Thrift, 1991）。もしくはそれは知的な分析方法に基づいて積み重ねられてきた。社会史に対するブライアン・パーマー Bryan Palmer の猛襲にしたがえば、カルチュラル・スタディーズの「言説への墜落」は悔いるべきものである。つまるところ、「言語は生活ではない」、そしてそれゆえに「批判理論は史的唯物論の代用にはならない」（p. xiv）。それ以上に、意味と言語に圧倒的な関心を寄せることで、「曖昧な審美主義」（p. 188）を特徴とする記述や分析の様式へと向かってしまい、「終わらないそして意味のない諸言語との戯れ」へと退化するのである（p. 30）。まさにパーマーが論じるように、社会的・経済的現象を言説的構築物として捉えると、最悪の場合には「ほかの何とも関係を持たない、まったくもってぶしつけでナンセンスでさらには言葉の戯れにすぎない記述であるばかりでなく、大学という保護主義の要塞におけるもっとも自己提示的なアバンギャルド的包領という擬似知識的ゲッター以外の何ものでもない」（Palmer, 1990:199）ものを生み出すのである。もしわれわれが今、パーマーの議論にたとえ少しでも賛同するなら、歴史地理学的唯物論という経済地理学の伝統は重要な資源として捉えられるべきだろう。この考えは「言及しうる言説の外側にはなにも存在しない」（Sayer and Walker, 1992:12）という考えに対抗するものである。そしてそれは決定主義や目録 table にある現実性 reality という扱いにくい諸問題（このセクションの Painter を参照）をなおも持っている（もちろん、この目録は言語を通してのみではなく、もし私が頭

をぶつければケガをしてしまうような物質的なものを通して創られる)。それは学問以外でも実用性を持つような政治プロジェクトと、あるいは「黒ずくめ」の人々、それを脱構築と呼ぶことにより無意味に自分が賢明であることしたがるポロネック着の知識人など以外の人々にとっては深刻な問題である、仕事の確保や貧困といった日常生活の諸問題と結びついている。

これまで述べてきた全てについては、読者は十分理解しているだろう。文化論的転回という名の下でおこなわれてきたいくつかの社会科学的研究は、本当にひどいものである（おそらく文化論的転回のカテゴリーに陥らなかつたということが私の「貢献」だろう）。そして思想領域のあらゆる再構築においては、目新しさや革新をめざす一方で、重要な経験的事項や大変な苦勞をして手に入れた理論的洞察を捨て去るという危険をつねにおかしている。だがしかし、こうしたことに思いを巡らせることは重要だけれど、私には文化的なものから経済的なものを防御することが、文化論的転回に対するとくに生産的な反応であるとは思えない。優秀なリアリストなら誰もが知っているように、そうした反応は文化的分析の中で必要となる問題に対して知的生産をほとんどしないという間違いを犯してしまう。またこうしたことは、たとえば、それは資本家と非資本家の経済的諸実践の関係（例えば賃金が支払われる経済と家庭労働という不払い労働）であれ（このセクションでの Gibson-Graham を参照）、別の社会的区分や社会的差異を犠牲にして階級に対して付された理論的中心性であれ（Gibson-Graham と Massey）、コミュニケーション的行為の概念的周辺化であれ、もしくはマルクス主義的思想の生産偏重主義などであれ、政治・経済的分析に絶えずつきまとうジレンマからわれわれの気をそらすことができる。そしておそらく最も重要なこととして、ほとんど興味を引かないカルチュラルスタディーズにおいて明らかのように、救いようのない二元論を最後には簡単に再生産し、そしてまさに拡大してしまう。すなわち文化と経済は、精神的なものや物的なもの、観念的なものと現実、もしくは修辞学と現実性という対置のための手軽な記号となってしまう。このことはかなり残念である。これらの二分法のうちの最初の二つに取り組

むためには、たとえばわれわれは経済人類学者のモーリス・ゴドリエ Maurice Godelier が名付ける「観念的な現実」の可能性を常に取り込む必要がある。われわれは、

自然への人間の物質的な働きかけ—人間の意図的、意志的行動という意味だが—が遂行されるのは、必ずその初めから<観念的な>現実、表象や判断、思考原理の志向においてであること、この観念的現実、思考の外で、思考以前に、思考なしにうまれた物質的關係の、たんなる思考への反映では決してありえないことであった。（Godelier, 1986:10-11;邦訳 12）。

という事実を認識する必要がある。それゆえ、精神的なものに対する物質的なものの優位性、社会的活動に対するテキストの優位性、シニフィエに対するシニフィアン（シニフィエ）の優位性を説くことが重要なのではない。これらの二分法に対する批判的考察こそが求められているのだ。

もちろん、この内省が必要とするのは、こうした二分法が誤っていることを発見しなければならないということではない。それは—そしてまた、われわれが文化的なものや経済的なものを対置させるという困難な方法を取ると—経済と文化の間に分析的区分を設けてしまうことになってしまう。この可能性については、アンドリュウ・セイヤーによって興味深く述べているとおりである。セイヤーは、文化的なものや経済的なものがむしろ異なる論理に対して作用していることを論じている。彼が言うには、文化的実践は目的に対する手段ではなく目的それ自体として作用するというような、「内因的」指向を持っている。社会的行為をパターン化したり方向付ける意味や規範的価値はわれわれを束縛しているものであり、それゆえわれわれはこうした意味や規範的価値がわれわれにもたらすものよりも、むしろそれ自体を評価するのである。対照的に「経済活動や経済プロセスはとくに道具的な指向を伴っている。つまりそれらは究極的にはある目的に対する手段」（Sayer, このセクション Chapter 1, p. 17）なのであり、その目的とは社会生活の再生産である。それゆえに、われわれは経済的なものと文化的なものや物質的な分節化を考えていかなければならないのだけれど、両者の分析的区分を保持する必要もあり、

この区分は「その価値を内包し本質的に意味に満たした活動・器物・関係性と、社会生活の再生産という外的な目的を持つ道具的な諸活動との差異と関係して」作られるものである (this volume, p. 17)。セイヤーは経済と文化の領域を二分するために議論しているのではない。経済生活は常に文化的に屈折したものであり、「家族、コミュニティ、学校などの社会のほかの部分と同様に、経済も文化的場 [でつねにありつづけている]」(this volume, p. 17)。それゆえにこうした分析の形態は経済地理学が欠くことのできない部分ではあるが、経済地理学の問題は諸分析の唯一無二の経済的諸形態を介してのみ理解されうると彼は論じているのでもない。彼が論じているのは、ただ単に経済的なものと文化的なものとの合体を賞賛したり、文化的解釈とは全く違った領域として経済的なものを分析しようとするのでは不十分だということである。

実際に、この考えは非常に思慮深いものだと思う。とくに経済モデルの仮想世界が構造的調整体制などを通してそのような権力を履行するとき、一私自身のように一経済理論にひどく無学であるような人々で満ち満ちている経済地理学にとって、それはあきらかに危険である。けれどもより一般的に、私はこの実践的な必要性が、経済論理と文化論理の間の基礎的な分析的区分というものを本当に結びつけられるのか、まだ分からない。出発点としては、経済的实践に対する自分たちの道具的な論理 (私に代わり Sayer は後にこれらがわれわれの特性であると正しく指摘している) 自体が文化的に構築されたものであること、自己と秩序の文化的反射作用をさらに支配する調整形態の外部にあるものとして経済生活を理解してきた部分を、かなり抽象的なレベルで認識することがわれわれには必要である。ドリーン・マッシー Doreen Massey が言うように、われわれは「十分に文化的に構成されたものとして、経済学や経済の地理学を理解する」必要がある (このセクションの Chapter 2, p.35) のである。それ以上に、セイヤーのように文化的実践と価値付けの非道具的形態を同一視してしまうと、文化と権力の諸関係についてのすべての考察を妨げる危険性がある。おそらくよりよい出発点は、こうしたものの諸関係に目を向けることだろう。手軽な例でいうと、この

セクションでジョン・アレン John Allen が、権力とその空間性についての別個の概念化や様式に関する明瞭かつとくに必要とされる全体像を示すことで、諸関係に目を向けている。われわれにとってありがたいこうした全体像とは、経済的・文化的実践とは異なる論理を探したり、そのかわりに文化的諸実践—記号的な意味の生産—と、経済的諸実践—社会生活の再生産—において見られる多様な権力の様式を考察することであろう (Clarke, 1991 も参照のこと)。それゆえに、文化的・経済的諸実践の論理は分析的与件ではなく、経験的調査にかかわることなのだ。私は言いたいのである。そしてアレンの言葉を使うと、いかに文化と経済という2つの諸実践が「支配する権力」「行使する権力 power to」そして「構成する権力」の諸過程と絡み合っているのかということ进行分析することで、こうした考察が前進していくだろう。

3. 文化的なものの中に経済的なものを持ち込む

それゆえに文化論的転回が経済地理学に対して大きな損失を与えると考える人々もあるが、わたしは文化的なものとの経済的なものの対置を頼みとして、戸を閉ざすことがどのようなかたちのものであれ正しい反応とは思わない。だが防御でなければ、攻撃というのはどうだろうか。あるいは、軍事用語のメアファーから離れて、私自身もっと紋切り型の商業的メタファーに身を落ち着かせるため、一時的に華やかに輸入された欧州大陸的な文化耐久財を消費するというよりはむしろ、経済的なものを押し出して、ディック・ピート Dick Peet が「エコノランド Econoland」と呼ぶ境界を越えて成熟した輸出をしてはどうだろうか (本書 Chapter 3 p. 45)。販売キャンペーンの2つの主な区分が十分に説明してくれる。第一に、政治・経済的理論化が、文化的な研究すべてにとって手近な助けとなること (「奥様、あなたは文化変容に関する説明が欲しいでしょう。私たちのフレキシブルな蓄積理論は、まさにあなたが待ち望んでいたものなのですよ」という具合に)。そして第二には、経済的なものはとにかくすでに文化的領域にインストールされている—セイヤー (本書)

から引用すれば、文化の領域はよく真に「経済化」されている一、それゆえ、良心的な文化の分析家にとって必要不可欠なものであること。これら2つの主張はしばしば相互に関係している。それぞれ異なる3つの議論を通して、これらについて考えてみたい。すなわち(a)文化に対する経済的な決定が存在する、(b)文化に対する経済的な操作が存在する、(c)文化に対する経済的植民地化が存在する、である。

文化と経済の関係を扱う際、決定の問題は、文化的上部構造の決定に対する経済的下部構造の役割と もっともよく結びつけられてきた。例えば、政治・経済的プロセスが文化的経験や文化の形式を説明するというように。この立場のすでに古典的な再主張を行ったのは、ポストモダンの条件に関するデヴィッド・ハーヴェイ David Harvey である (1989a)。その中では、ポストモダンの文化の形式が、それを形成する時間と空間の経験を通して (そしてこの形態が表象しようとするものを通して)、政治・経済的システムや、時間と空間の経験を生産する資本主義の空間的・時間的ダイナミクスにまで追跡されている。パワフルかつ影響力をもった著書にふさわしく、『ポストモダニティの条件』に対する批判的評論それ自体も引用リストの上位に並ぶこととなり、その議論は実際に知られているところである (Deutsche, 1991; Massey, 1991; Morris, 1992)。とはいえ、3つの批判がとくにここでは縦横である。第一に、ハーヴェイの3つの決定の連鎖 (資本主義的ポリティカルエコノミー—時間と空間の経験—文化形態) が、本当に彼が示唆するように切り離されたものかどうか、意義を挟むことができる。経験は文化形態の外側にあるのだろうか? 資本主義的な空間経済は観念・信条・文化表現からは隔離した現象なのか。もしそうでないとなれば

思考は社会関係から遊離した審級ではないし、社会には上も下もないし、幾重にも重層化されてできているわけではないのだから、こう結論しなければならない。下部構造と上部構造の区別に意味があるとしたら、水準や審級の区別でもなければ、同じく制度間の区別でもないからだ (Godelier, 1986:18-19;邦訳 21)。

第二に、ハーヴェイの経済決定主義の帰結のひとつがどれほど自らの文化的分析を弱めてしまってい

るかを見ることができる。これは関心の欠落を通してといったことではない。とくに原語であるドイツ語の *Grundlage* と *Uberbau* を用いてゴドリエが強調するように、下部構造 (土台) と上部構造 (住まれる家) の概念では、決して前者が全ての場面で重要性を持つものではないのである (Godelier, 1986)。むしろ問題は、経済的に決定されるようなこうした諸局面にのみ文化形態を還元させる読解へと向かう傾向にある。こうした読解は、分析の枠組みの外側に文化形態にかかわる多くのことを取り残してしまう。ハーヴェイの場合では性化とジェンダー化がそれに当たる。第三はさらに抽象的であるが、ハーヴェイの分析がマルクス自身の「人類という種の自己—生成的行為を労働へ」の哲学的「還元」を要約し、再確認していることである。たとえば

マルクスは、かれの実質的分析においては、物質的活動性およびイデオロギーの批判的止揚、道具的行動および革命的实践、労働および反省のそれぞれを一体とするカテゴリーの下で、人類史を捉えている。しかしマルクスは、自分の仕事を、労働によるだけの類の自己構成という限られた考え方で解釈する (Harbermas, 1978:42, 邦訳 53)。

それでは、この経済による文化の単線的決定に代わるものはあるのだろうか。この問題は、経済地理学と地方政治との諸関係を明らかにしようとする本書のジョー・ペインター Joe Painter の章で最も明確に示されている。彼はどんな決定概念にも反対するというよりも、むしろこれら2つの領域の可変的な「構造的連結」の中で作り上げられる双方向的な決定を強調している。さらに、ボブ・ジェソップ Bob Jessop の研究をもとに、彼は地方政治と空間経済の両方は、彼が「オートポイエティック・システム」と名付けるものであると論じる (本セクションの Chapter8, p.102)。つまり、それらは、自らの活動のために自らの境界を確定する独立した (しかし相互関係的な) システムとして存在しているということである。そして、地方政治はいかなる事前に決定された付託物をも有していない。地方政治とみなされるものは、局所的な政治的行為や言説を通して確立される。空間経済のようなそのほかのシステムによって重層的決定されたまたそれらの決定因となるのである。もちろん、理論的には、この種の「反本質

主義者」的な決定はかなりあいまいである。実際、それが、現行の特定の双方向的な決定や境界の構築を生み出すような政治的・経済的生活のフローのただ中にあるとき、どのようにして何か別のものとしてあることができるだろうか？ しかしだいたい、それは経済的なものとそ多様に構築された他なるものとの関係について考える中で、われわれが決定主義と決定の不在のどちらかという単純な選択を行う必要のないことをほめかしている。

多くの点で、この分析は、芸術や文学のような認知された文化的生産物の領域に関係して定義されるような「文化生産の領域」—それは芸術や文学といった明確に認知された文化的生産の領分によって定義される—や、資本主義社会の中で制度化された広範な「権力の領域」に関するピエール・ブルデュー Pierre Bourdieu の研究と類似している (Bourdieu, 1993)。ブルデューの目論見は、文化的生産物を内的に分析すること、あるいはそれが広範な権力の形勢を単に反映したものにすぎないというような外的なものへと還元させていく分析とも違ったものを提供することにあつた。これを達成するために、彼は文化的生産物が別個の「領域」の中で作用することを論じた。すなわちそれは「自らの機能の法則をもつ構造化された空間」(Johnson, 1993:6) であり、その資本の独自の形態なり評価でもある。しかし文化的領域はより広範な権力の領域に状況づけられるのであり、「社会における一定の支配的な権力関係」(前掲:14) の中で、それは権力関係を反映するというよりも屈折させていく動態なのである。それゆえに、文化的領域における、重要な構造化の次元はこの屈折の性質によって示されるのである。一方では文化的正統性の他律的な原理が、外からは認められた価値評価を主張するけれども、逆に自律的原理は、外からの価値評価 (たとえば経済的成功あるいは市場の成功に対する評価の低下による) の論理を逆転させることを強調するのである。これらの原理のバランスやそれらの正確な形態は、文化的領域の内側や外側にいる主体的行為に依存していて、また特有の文化の圏域の「変形」もしくは「自律化」へと向かう傾向の中に反映されているのだ (Featherstone, 1995a)。こういった傾向は、代わる代わる経済的領域と文化的領域との関係の形成を

手助けする。例えば強力な文化の自律化という状況下では、諸関係は意味作用の諸実践と社会的再生産の諸実践の間の矛盾によって (対抗文化的快樂主義と後期資本主義の労働倫理については Bell, 1979 を参照)、また/あるいは日常生活に関する文化の専門家の影響によって (日常生活に関する説明や実践への「誇張的な生活」に関する文化の専門家のイデオロギーと実践のインパクトについては、Featherstone, 1995b)、そして/あるいは、経済編成のダイナミクスを通してなされる文化的生産の再構築によって (例えば、専門家による文化的生産の商品化を通して) 特徴づけられる。

それゆえに、ペインターと同じくブルデューは、構築された経済的領域と文化的領域の構成的な相互関係という双方向的な分析を通して、経済的因果関係という決定的な特性がなくても決定の問題にアプローチできる方策を示した。この中で、彼はまたレイモンド・ウィリアムス (1981) が「文化の社会学」の中で設定した研究課題と並行している。もちろん彼はカルチュラルスタディーズとはどちらかといえば違った、文化研究に対して経済的分析のもつ理論的重要性について考える方法を例示している。それは決定よりも「操作」、因果的連続よりも隠喩的な生産性についてのものである。彼の文化的領域に関する記述の中でもとくに審美性や嗜好に関する批判的分析において (Bourdieu, 1984)、ブルデューは資本・価値・蓄積・インフレーションなど経済概念の隠喩的な応用により文化的実践を探究しようとしている。これらの概念をブルデューが応用したその詳細は、すでによく知られていることだから、われわれは留保する必要はない。ここでは3つの中心的な議論によって成り立っていると述べておけば十分だろう。第一に、審美的・倫理的な評価という文化的実践は、利害関係と無関係なのではなく、社会的再生産の問題を自己構成や自己発現の問題と結びつけている。第二に、生活の中の経済的なものと文化的な領域の間における交換と転化の (複雑な) プロセスが存在しており、ブルデューは経済的・文化的・社会的資本の多様な形式間の相互関係を精査する中でそのプロセスを把握しようとしている。そして第三には、(『ディスタクシオン』の最初のページから引用すると)「文化的財にもひとつの経済がある」

一方で、「この経済は独自の論理をもっている」ということである(1984:1, 邦訳1)。ブルデューは、文化的実践は狭義の経済的合理性に還元されると言っているのではなくて、むしろ、文化的実践の経済的合理性こそが分析され理解されなければならないと言っているのである。まさに私がすでに示したように、近年の研究で彼は、多様な諸関係、経済的・文化的製品に対する複数の論理の可能性を詳しく述べることで、このことをより明確に述べているのだ。

それゆえ、ブルデューによる文化領域の概念的な経済化は、文化的商品や文化的な意味が、この生産・流通・消費を支配する論理を必然的に有する領野において生産され、流通され、消費/使用されるのだという主張に基づいている。これらの論理は(a)それらが生産・流通・消費のプロセスに関わり(b)それらが社会的再生産のプロセスにおいて重要な役割を果たす、という限りにおいて経済的と名付けられるだろう。これは文化的圏域の「経済化」という説明にしばしば付随する主張、つまり文化的生活は資本主義的経済の侵略によってますます「植民地化」されているというものとはいく分異なっている。後者の考えでは、経済は資本主義と同義であり、特定の経済的論理は文化的領域においてますます支配的なものとして捉えられている。この資本主義の論理にたいする理解は、普通は収益・手段・支配の概念の中にくっついている。それゆえにテオドア・アドルノ Theodor Adorno にとって、文化的な生活を「文化産業」へと転化することは、内在的な使用価値—異なる事物の関連性を持った脱=差異化(錯覚的な擬似=再差異化によって隠されている)—に対する付帯的な交換価値の勝利(本セクションの Sayer を参照のこと)、そして道具主義的な合理性の閉鎖的な形態をめぐるいわゆる「フリータイム」の組織化された囲い込み(Bernstein, 1991)を伴ったものなのである。同じような多くの議論がジョージ・リッツァ George Ritzer による大衆文化のマクドナルド化への批判の中で単純化された。事例としてマクドナルドを用いる際、彼はこの文化的産業化や合理化を、効率性のイデオロギー(需要の迅速な充足として定義される)、計算可能性のイデオロギー(全てを計量する可能性)、予測可能性のイデオロギー(われわれが信拠しうる標準化)、支配のイデオロギー(大衆文

化の組織化による)に分解した(Ritzer, 1993)。

経済地理学がその専門的な知見を文化の諸問題に「輸出」すべきであるとか、またわれわれが人文科学や人文地理学の中で必要としているものが、文化論的転回 turn よりも政治・経済的回帰 return なのだといったことを論じる多くの仕方が存在しているのだ。私はこれらを、経済的決定、操作、植民地化とラベル化した。これらの順番を逆にして、その限界のいくつかを要約し、抜き出してみよう。第一に経済的植民地化の問題である。資本主義的な文化産業への関心は、文化的生活が資本主義的編成の網の中にますます編入されてしまう傾向があることをときに正しく問題化してきた(レジャー、トレーニング working out, 団体設立に関する魅力的な物語として, Willis, 1991 を参照)。しかし、経済的なものが文化的なものを変形させる一方向的なプロセスとしてこうした編入が捉えられる中で、たいていは植民地化の隠喩は展開されてきた。しかしまた、それほど隠喩的ではない植民地化の分析がますます証明しているように、植民地化は決して一方向的なプロセスなどではない。それはつねに植民地化される人々だけでなく、植民者をも変容させてきたのである。ニコラス・トーマス Nicholas Thomas が太平洋地域における植民地主義と物質文化の説明において用いた語法に従うと、植民地主義とはアイデンティティや商品や支配の様式を「もつれさせる」プロセスなのである(Thomas, 1991)。たとえば、ポピュラーミュージックに関するアドルノの分析に應える中で、バーナード・ジェンドロン Bernard Gendron (1986) はドゥーワップの事例を用いながら、文化産業の生産者、消費者、商品が、いわば自動車産業などとは別個の標準化、個人化、革新のダイナミクスを経て処理されているが、それはまさしく表情豊かな文化的生活における彼ら/それらのポジショナリティのためであることを例証したのである。そのような文化的なものとの経済的なもののもつれ合いはまた、消費者が特定の使用価値を交換された商品へと再挿入することに関する数え切れないほどの説明において示されている。たとえば、スーザン・バック=モース Susan Buck-Morss は個人のスケールでの産業の生産と交換について以下のように議論している。産業の生産と交換は

消費者の私的な夢の世界の寓意画集の中のイメージを望む消費者によって、商品が領有されるのを防いでいるのではない。このが生じるために、人間の労働によって生産された使用価値としての最初の意味からの商品の疎外が事実上前提条件となっている (Buck-Morss, 1989:182)。

また国家的な編入というスケールでは、ダニー・ミラー Danny Miller (1992) がアメリカのソープ・オペラ *The Young and the Restless* のトリニダード固有の奪用を検討している。もしくはまた別のより漠然としたかたちでは、これらの経済的なものと文化的なものの複雑な関係性というのは、雇用と職場に関する労働者の居住地選択の分析において明らかにされてきたとも言える。こうした居住の選択は、部分的には自己をいっそう労働へと仕向けることを通してなされる、組織的な自己の植民化に対する反応 (Casey, 1995) である (おしゃべりする自己、うわさ話する自己、家に電話をかける自己が現れるときには組織的な規律化に対する欲求へと向かうし、熟練した労働者としての自己が、まさしく組織が築きあげあるいは見本として提示しようとするものであるときには満足へと向かうこともある) (Crang, 1994a)。しかしこれら全てのケースにおいて、文化的実践の一方方向的な経済化など存在しないし、経済的实践と製品は文化的生活の中でもつれあひながら改訂されるのである。

また文化の資本主義的植民地化を強調することは、経済的なものと資本主義的なものを同等にみなすというリスクもおかしてしまう。このセクションに収められた論考でのギブソン＝グラハムが用いた語法によると、「資本中心主義 capitalocentrism」の問題、つまり文化の経済を資本主義的な文化産業によってのみ捉えてしまうという問題がここに存在する。しかしこれとは反対に、ブルデューのように文化の経済的な「操作」を強調することは、複合的な経済論理の余地を認めることによって、基本的にはこの解決に役立っている。まさに、例えばブルデューの例を用いると、経済資本を最大化するために文化の創造性を用いることと、経済的見返りが無いことを通して文化的創造性や資本を知らしめるべく決定すること、この両方の要求を満たしているのである (す

べてを売り尽くさない論理、インディーズ系のレベルにとどまる論理など)。しかしブルデューがいかに異なった経済的ゲームが異なる領域で行われているのかを強調する一方で、これらのすべてのゲームが、たとえ異なるルールや賞品を有しているとしても、彼はいまだに勝ちたいという人々によって演じられているという前提に依拠してしまっているのだ。いくらその資本が多様であるとしても、そこにはまだ資本を最大化しようとする単一の経済論理が存在している (Honneth, 1986)。結果として、ブルデューの文化領域を統合しようという目論見では、文化的生産を特徴づけることのできる、より虚無的な刺激を位置づけることは難しいのである (例えば、Marcus, 1989)。彼の議論には勝ちたいと思わない者、すなわちピッチで行われるゲームが何であろうとそれを拒否することで、ただ人をいらだたせゲームを無効にし、あるいは一般的には挑発したいと思っている者がほとんど存在しないのだ。そしてまたシンディー・ローパーに倣って金切り声を上げることでただ単に楽しみたい少女 (そして少年) のための場所もない。つまり、文化的実践の表出的な可能性を、ブルデューの分析における経済的な語彙目録で概念化することは困難なのである。これは彼が間違っているということの意味するものではないし、少なくとも相応に文化的であるならば、文化的生活が資本蓄積に関係がないということはない。むしろ、経済的なメタファーでは捉えることができないいくつかの文化的実践の側面があるかもしれないということなのである (たとえ文化的実践が徹底的に商品化されていたとしても)。

決定の諸問題に注意を払うことで、経済的側面と文化的側面の相互に構成的な構築および再構築という双方向的な分析を通して、私は経済が文化を決定するという単一指向的な因果関係の説明を超えていくことのできる明らかな可能性があるのではないかと議論してきた。しかしながら、このことはある程度の所までしかわれわれを導きはしない。というのも、部分的にはそうした主張は、経験的な研究を行わないかぎり何も言っていないに等しいからであるが、しかし、そもそもは文化領域と経済領域といった別々の領域への関心が、どちらかといえば部分的

な組織的想像力を展開してしまっているからだ。パーソナルなサイバネティックなヒエラルヒー、あるいはマルクス主義的な下部構造と上部構造という図式を再配置し再結合することは価値あることである。とくにこれらが、またほかの組織的想像力がいく分か分析されるならば、こうした再配置・再結合は価値を持つのである。しかしそのような経済と文化という名詞への関心は、それら自体文化的構築として理解されるとしても、経済的なものがいかに文化的であり文化的経済なのかという形容詞的な諸問題について、われわれがほとんど理解していないということの意味するのである。だからわれわれはこれから、どれほど経済が文化的に埋め込まれ、表象され、物質化されているのかということを考えることで、形容詞的な諸問題へと向かっていこう。

4. 経済的なものを文化的なものの中に埋め込む

単に構造的な組み合わせとして経済システムと文化システムという異なる両者を分析することを乗り越えるひとつの方法は、経済的な諸活動がいかに生じているのか、またそれらが文化的に構築された文脈の中がいかに埋め込まれているのか、ということを考えることである。1950年代のカール・ポランニーによる実体主義経済人類学の概説がこうした試みの最初であるが、それは経済的なものがつねに同じ公式の論理によって支配されている普遍的実体ではなく、それぞれの時間や場所の中で別個に制度化された一連の諸活動であるという議論を土台にしている。とくに、ポランニーは「近代」社会と「非近代的」社会において経済の占める場所はむしろ異なっており、その結果として、前者だけが経済の最大化のために純化された空間を有しているというように、それらの経済的合理性も異なるとした。より近年では、実体主義経済人類学は、近代-非近代というこの二分法を精錬する必要があることを強調している。「近代」経済はポランニーが想定したように純粋ではなく、「非近代」経済は彼が想定した以上に最大化の論理を展開することができる(Orans, 1968)。また近代と非近代という観念は、多くの異なる「グローバル・モダニティ」の世界においてはますます役

に立たなくなっている(Featherstone et al., 1995)。それに代わって「局所的で状況に応じた(経済)論理」のより錯綜した見取り図(Prattis, 1987, 20)が必要とされている。その場合の見取り図とは、多重に縮尺される経済的实践と組織化の埋め込み具合を表象するものである。

こうした見取り図は、とくにメリック・ガートラー-Meric Gertler, ディック・ピート, リンダ・マクドウェル, スーザン・ハルフォードとマイク・サヴェジ Susan Halford and Mike Savageらによってこのセクションで論じられている。ここではこれらの説明から、2つの要点を引き出してみよう。一つめは分析に適したスケールにかかわるものである。経済的「合理性が広く社会化され文化化された個人の幅のある経験から引き出される」限りでは、これは、個人的なレベルから開始されるだろう(このセクションの Peet, Chapter 3, pp. 37-38)。次いで、われわれは、共有された価値や規範といった何らかの有機的に組織化された文化に対して当たり障りなく注意を喚起することよりもむしろ、企業が組織的なアイデンティティー-それが新人採用の方針に基づく濾過=純化の方法を通してであろうと(McDowell),あるいはより限定的には抵抗するかたちで組織の変化に関する言説を規律化するという方法を通してであろうと(Halford and Savage) - を作り上げることを通して(du Gay, 1996; Rose, 1990), 特定の経済的合理性といった事に取り組むため特定の方法をいかにして確立しうるのかということとくに焦点を合わせることににより、組織や企業のレベルにまで進むことができる。われわれはまたローカルな、リージョナルなスケールでも考えることができるし、ローカルあるいはリージョナルな制度的形態を通して再生産されるものとしてのそれら自体の社会的・環境的イメージによって特徴づけられる、独特の文化的構成と経済的構成の可能性を考えることができる(Peet)。最後に、異なる法的環境や制度的環境の中で経済的に合理的であるとされるものが形成される際の役割を追跡するために、政治的調整に関するナショナルなスケールと超ナショナルなスケールのレベルで考えることも必要である(Gertler)。これらの異なるスケールでの文脈化がどのように相互に作用しているのかということは、

もちろんのこと魅力的な研究課題である。すでに回答されているいくつかの問題をここでくりかえしておこう。より一般的にはっきりとした規範と変則性を伴う組織的なアイデンティティと個々のアイデンティティ実践に関して、いかに個人と企業は交渉しているのかという問題。どの程度企業は法人的な自己成形を地域ごとに分けるのかという問題。そして、グローバル化されたフローの空間の中で構成される時、地域的もしくは国家的制度、アイデンティティ、またイメージに何が生じるのだろうか。

これらに対する回答は、まさにいかにして経済的な実践が埋め込まれているのかということ明らかにする必要性によってさらに複雑になっている。社会経済学に関わるいくつかの研究課題に着手する中で、シャロン・ズーキンとポール・ディマジオ Sharon Zukin and Paul DiMaggio はある点では役立つだろうがほかの点ではそうではないのだが—こうした埋め込みの文化的・構造的・政治的形態を区分している (1990b; Granovetter, 1985 も参照のこと)。彼らはこれらを以下のように定義している。

われわれが経済的な行動が「文化的に」埋め込まれているというとき、われわれは経済的戦略と目的を形成する際に共有されている集合的な理解の役割について言及しているのである。文化は経済的合理性に制限を加える。つまりそれは市場交換を禁止しないしは制限するのである。…文化は取引条件を形成するだろう。…文化は…利己的な行動の戦略を指示し、…そしてそれらに合理的に携わる行為者を規定する。…最終的には、文化的に異なるそれぞれの誠実の定義ののちの行動を人々に取らせることで、規範と構造的な理解は市場交換を調整するのである。…「構造的な埋め込み」とは、今なお続いている個人間の関係のパターンにおける経済的交換の文脈化を指す。われわれは「政治的な埋め込み」により、経済的制度と決定が経済的行為者と非市場的な制度—とくに国家と社会的階級—を含む権力闘争によって形成されるその仕方に言及するのである (Zukin and DiMaggio, 1990b:17-20)。

私はこれらの区分が有益であると述べたが、それは、(a) 経済的埋め込みが文化的に構成されるというだけでなく、社会的・政治的次元でも構成されるということを示していること、(b) 文化論的転回

の概念において広く普及している文化的なものについての理解—同一の社会集団において共有される理解や規範のような—を分節していること、こうした限りにおいてである。けれども、この文化の定義がどちらかといえば限定的なものである限りにおいて、これらはあまり役に立たない。少なくとも、もしわれわれがそのような文化概念を採用するとすれば、—このセクションのメリック・ガートラーが論じるように—それはいかにしてこれらの理解や規範、社会的集合性が、社会的諸関係と政治的活動を通して生産されるのか、ということ进行分析するのに必要不可欠なものとなる。文化は説明できない最後の最後にステージに引っぱり出され、それでもって一件落着となる、デウス・エクス・マキナ *deus ex machina* になってはならない (それはつまり彼の文化だからだ、といった)。理由としてあるいは、少なくとも説明の文脈として文化を位置づけることは、最悪の文化理論の運用という未成熟さをただ単に無批判に繰り返しているにすぎず、また人種もしくはは *民俗 Volk* という観念に関わる文化概念の代用の長く平凡な歴史をうまく利用しているにすぎないのである (Young, 1995)。しかしわれわれはこのセクションの諸論考が示すように、こうした文化の定義を越えていくことができる。われわれはより広範な文化秩序の中に経済活動を位置づけることで、ブルデューの文化生産の位置づけをより広い権力の経済的領域の中で転換する以上のことをなす。つまり、いかに政治的そして社会／構造的な埋め込みが、アイデンティティ形成や重要な意味作用といった文化的諸実践と密接に結びついているのか考えることができるということである。しかしこのためには、われわれの関心を文脈化や埋め込みから、経済的生活の表象的そして言説的構成へと転換していかなければならない。

5. 文化的なものを通して経済的なものを表象する

少し詳しく述べてみよう。埋め込みについて語ることは、その文化的な場所が (いくつかの広範な空間スケールの表象物として) 個人的なものであろうと、企業であらうと、地域であらうとはたまた国家であらうと、経済を文化的文脈、場所化された文化

の中に状況づけることである。文化的なものにおける経済的なものの表象を語ることは、いかにこれら全ての「場所」がそれ自体、文化的に構築されたものであるのか、そして構築物としてのそれらがいかにして一般に経済といわれるもの（労働、仕事、家庭、収穫、利益など）を作り上げるそのほかの多くのやはり構築された経済的実体と並存し、その構成を手助けしているのか強調することなのである。

おそらく、経済的分析それ自体の修辞学的な仕組みを分析することが、そのような構築物に取りかかる最も簡単な方法である。それゆえにドナルド・マクロスキーは、いかに経済学が「人間の対話」の一部であり、したがってその分析道具や表現形態が、ただ単に実質的な対象を派手に飾り付ける文体的光沢といったものなどではなくて、対象自体の構成要素であるのか詳述している。ブライアン・パーマーによって主張されたある種の唯物論に直截に反対しながら、彼は発話と思考の諸様式に対する関心を擁護するために修辞学を概念を展開しているのである。

様式と実体の区分は、寄生虫のようにわれわれの文化の奥深くに巣くっている。…だがそれにはほとんど利点がない。それは実体などではなく全て様式なのだ。考えてみよう。アイススケートや静物画やあるいは経済分析において、様式と実体を区分するものは何であろうか？ …ケーキの「実体」は基本的な成分のリストではない。それらが結びつけられる様式なのである（McCloskey, 1988:286）。

経済地理学においては、トレヴァー・バーンズ Trevor Barnes が同様に、このことを新古典派とマルクス主義的経済地理学のそれぞれの基礎をなす物理学的・生態学的メタファーの読みを通してある程度探求する中で、「理論というものはそれが解釈しようとする現実を創造するものである」（1992:118）ということをも認める分析に賛成している。

ところで、経済学や経済地理学が、象牙の塔に閉じこめられた諸活動ではなく学術活動を越えた経済政策や活動を調整したり形成することに役立つ実践なり制度的な場であるかぎり、経済的なものこのように修辞学的（McCloskey）・隠喩的（Barnes）構築を理解することは、（あなたの考え方次第であるが）有益だったり無力であったりする学問的な自省

のための単なる刺激物といったものではないのである。ここに潜んでいるのは、経済生活を決定するために用いられてきた理解の形式についての、そしてこれらにおいて学問的な経済的理解が果たしてきた役割に対する明白に広範な問題性なのである。トレヴァー・バーンズは、単一の学術的メタファーがいかに「個々の場所の多様性に対していかなる余地も」残していないのか、このことを強調している（1992:134）。繰り返すが、おそらく経済人類学においてこの研究課題は十分に進められているけれども、私にとってはステファン・グードマン Stephen Gudeman による「（異なる土地の）生計に関するメタファーとモデルの直接的な比較と対照に（基づく）文化経済学」の概要の方が印象的である（1986:ix）。グードマンにとって、科学的な経済学は多少ともこうしたローカルなモデルとして作用するものであり、それは、作物は髪であり収穫は散髪であるというような焼き畑農耕作の理解、あるいはそのほかの普通の経済的活動の理解にあるものは相対化されるべきものなのである。そのような文化（地理学的）経済学は、まさに本書に収められたディック・ピートの関心でもある。彼もまた、「経済的合理性は文化的に創造されており、多様な形態を取り、明確な地理を有する」（p. 38）と論じる。さらに、彼のニュー・イングランドの「言説的編制」に関する説明は、いかに経済的なものの文化的表象が経済的生活によって形成され、またそれを形成しているのかというグードマンの関心に対する魅力的な例証を提示しているのみならず、こうした相互的な構成をもたらす「言説的調整」および「生産の文化的秩序」といった諸観念を発展させてもいる。こうしたものが、単なる経済的現実の言語論的もしくは修辞学的形成を越えて、経済的実践が語られ身体化される中で秩序化されることへと向かっていることを示唆している限りにおいて、両方ともとくに生産的であると思われる。まさにジョン・ロウ John Law によるダーズベリー研究所³⁾での諸関係のネットワークやそのようなネットワークの維持にともなう表象行為に関する、薄いけれども野性味あふれるすばらしい民族誌（1994）に従うと、そこで展開されているのは、共時的な文化・経済的モザイクそして／あるいは通時的な文化・経済的変容のいくつかの形態の中で、共

存し相互に関係しあう生産の種々の文化的秩序に対する関心だけでなく、同様に組織的行為者たちにより演じられたり間違いをおかされたりする多様な「秩序の様式」に対する関心なのである。別言すれば、この種の分析の中で明らかになり始めたことは、場所と時間の種別的な文化表象の形態の中に経済を文脈化すること（私が思うにそれはグードマンが示していることである）、もしくは言説的編制の中にそれを文脈化すること（Peet が始めていること）以上の何かである。こうしたものの代わりに、様々な経済的实践の言説的秩序化—その秩序化は多かれ少なかれ日常化した方法で、特定の時間と場所の中で実行される—の可能性を考慮に入れるために—おそらくそれ以上のものではあるまい—、文脈の観念はまるごと動態化され再空間化されることとなる。

6. 経済的なものの文化的実体化

経済的なものと文化的なものとの関係を通して私が最後に考えなければならないこと、それは性格的に文化的であるような「モジュール」の生産、流通、消費に関わるものとして経済を捉えることである。この考えにおいては、経済生活の言説的秩序化は単に調整に関する問題などではない。それらはそもそも経済生活（の要点）なのである。

この議論の継続的試みのひとつは、スコット・ラッシュとジョン・アーリ Scott Lash and John Urry のものである（1994）。一般的には、彼らは経済と文化の脱差異化の認識について論じているといえる。

経済のプロセスと象徴のプロセスはこれまで以上に複雑に絡み合い、また節合し合っている。つまり、…経済はますます文化の方へ屈曲し…文化はますます経済の方向に屈曲しているのである。このように、このふたつの境界はますますあいまいなものとなり、システムと環境といった別なものに対しては経済と文化といった区分はもはや機能しないのである（Lash and Urry, 1994:64）。

もっと具体的に言うと、彼らは以下のものに関してこの脱差異化を説明している。(a) 情報経済の「言説的再帰性 reflexivity」（「幹線」を流れる知識の言説的な性質という点からみると、生産システムはエキスパート・システム⁴⁾に依存したり相互に結びつ

けられるのではなくて、エキスパート・システムそれ自体となるということ）（前掲:108）。(b) 文化産業の「美的再帰性」（アドルノとは反対に彼らは、「部分的には審美性の観念に関わりながら編制される『文化産業』…の成長は…ますます進行する経済生活の文化化を反映している」と論じている（前掲:109）。(c) 結合された多様なサービス経済の情報のかつ審美的な相互作用、それはつまり「サービスについて語るということは、情報と象徴について、そして多様なポスト産業空間においてその両者がますます重要となっていることを語るということである」（前掲:222）。そして (d) 日常生活のより全般的な審美化の一部としてツーリズム的な消費形態の成長。このことは文化地理的な差異のコードがもはや資本主義的な均質化に対する外的な障壁としては作用せず、資本主義経済の文化的—地理的の差異化を通して活発に生産されるような消費形態としてあることを示している（Grossberg, 1995; Cook and Crang, 1996; Crang, 1996 も参照のこと）。

このセクションにおいてアンドリュウ・セイヤーが正確に指摘しているように、このようなツーリズム的な消費形態の経験的な意義や、こうした情報的、審美的、相互作用的な経済部門については、入念に検討される必要がある。明らかに、ラッシュとアーリは今日の後期資本主義経済の様相を部分的に説明している。しかし同時に、たとえばサービス雇用に関する概念的混乱やその統計的計測といったいくつかの月並みな関心が、彼らの刺激的な分析を殺してしまっていることはひどく残念なことである。むしろ、より一般的かつ間接的な3つの示唆を取り上げる方が良いだろう。ひとつは経済活動の物化がこれらの諸活動それ自体の性質の問題であることである。これはかつてダニエル・ベル Daniel Bell がポスト産業社会について述べたことに関わる（彼の分析はかなり欠陥があるが）。例えば、「今や個人が機会とかかわりをもつのではなく、ほかの個人に話しかけるといふ事実は、脱工業社会における仕事の基本的な事実である」（1973:163, 邦訳 219）との彼の前提をみれば明らかである。生産の手段と物質はその生産プロセスとその社会的諸関係の特性にとって問題となるという彼の議論を認めるために、ベルの歴史的分析を支持する必要はない。なるほど、これ

らの物質の性質に関心を払うことは、経済活動の組織化それ自体における重要な構成要素としてそうした物質の役割を認識することである (Law, 1994)。それゆえに、ある人が原油や音楽作品、自動車、もしくは洗練された会話といったものを生産し、流通し、消費しようとしてまいと、問題となるのは生産、流通、消費といったこれらの諸契機であり、これらの契機が相互に結びつけられる文化的回路の特質なのである。

第二に、ラッシュとアーリの分析は、経済活動のある特定のモノ—いわば物的な消費財—へと還元することがいかに限定されているかを強調する。このことは彼らが示す別の諸事例がそのような物的な商品と無関係に存在している、ということではない。例えば対人的なサービスはしばしば物的な製品の配達のような場で行われるし (例えばレストランでの食事)、また物的なセット (例えばレストランのインテリアのような) で演じられる。認識に関わる労働は情報を記憶・保存するための物理的な物質を必要とする (例えばディスクのような)。そして、いわばファッション産業のような美に関わる労働は、様式的な効果を実現するための物理的なモノを当然配備するのであり、その創造的で審美的な欲望を実現するためには、その物理性 (例えば衣服の性質、色合い、雑誌などなど) に対して十分な注意を払わなければならない。ただしこのことを認識することで、それらの商品に関する分析が終了するというわけではない。むしろ必要なのは、経済地理が示す物的に外来的な特徴や、それらの生産・流通・消費のプロセスを認識することなのだ。例えば、対人的な会話の生産要素、もしくは対人的な生産プロセスの中を流れていく会話のエコノミーを考えてみれば良い (例えば、Drew and Heritage, 1992; 規格化されたサービスの販路において会話が型どおりとなることについては、Leidner, 1993; もしくは発話行為としての「サービス・エンカウンター」については、Ventola, 1987)。もしくは、家政であろうと公的な圏域においてであろうと、福祉関係の労働の中で作用する愛のエコノミーを考える必要がある (フライトアテンダントの感情的労働について最も有名なものとして、Hochschild, 1983 を参照のこと)。さらにはダンスやハイキング、個別販売のセールスでの

交渉、会議への出席、タイヤの交換、搾乳のための乳牛の購入といった、消費や生産の諸実践に見られる身体的なパフォーマンスの多様なエコノミーを考えてみよう (例えば、Crang, 1994a; Crang, 1997; McDowell, 1995 を参照のこと)。

第三に、経済的实践において用いられる多くの様々な「モノ」をただ単に記録だけでは十分とはいえない—時に必要となることはあろうが—。われわれはまた、何かこれまでとは異なる経済の地理や、経済的实践においてこれらが活発に構築されていることを捉えなくてはならない。これらの流動性と固定性に対する潜在能力。これらの異なった監視形態の装着。これらが取る展示あるいは「展示能力」の地理的布置、すなわち、見えるものと見えないものの経済、信用と不信の経済、展示様式 (例えば、上演され、演じられ、触られたもの)。こういったものを捉えなくてはならないのである。

結論

結論にあたり、いくつか振り返ってみよう。私は経済地理学が人文科学における多数の文化論的転回の文脈の中で自らを再構成していると議論してきた。最初、これらの文化論的転回のインパクトは単純に言って、広義では同じ関心領域に関係しているはずの、経済的アプローチと文化的アプローチとしていまだにどちらかといえば分かれてきたものところに持ち込まれた。例えば、消費の諸問題は供給システムとその調整といった政治・経済的分析を通して、また消費者の実践、消費領域や、消費された製品と場所を結びつける心象地理の文化的分析を通してアプローチすることができる。これらの2つの分析は相補的もしくは競合的なものと見なすことができるが、互いに距離をおきつけてきた。誰が消費に関する「文化地理学者」であり誰が「経済地理学者」であるかを区別することはたやすかった。

けれども境界はだんだんとぼんやりしはじめてきている。供給と調整のシステムに関する記述は、それらのシステム内部における利害関係構築についての表象的な政治学と詩学を考察している (例えば、Marsden and Wrigley, 1995 を参照のこと)。またそ

れほど多くはないものの、消費者と彼らによる商品システムの使用に関する説明は、貨幣価値、商売、家族倫理、家庭内の愛情といった問題を考えるために、アイデンティティの問題から移行してきている (Miller, 1995b)。このレビューにおいて、私は、どのようにして経済地理学者が文化分析の諸形式を採用することができるのか—また現在採用しているのか—ということに関心を寄せてきた。純粋なる政治・経済的企図を防護すること、そのことに魅力がないわけではないが、そのために文化の諸問題をただ単に拒否することは、政治・経済的アプローチが直面する多くの現実的困難と不安げに同席する自己満足をうっかり暴露してしまうことになる。私は言ってきた。そしてそのかわりに、私はもっとおおっぴらに応答することで、またいとうことなく経済地理学のアイデンティティを動揺させることへの大いなる意志を持つことで産み出されるいくつかの可能性の概略を示してきたのだ。多くの選択肢をレビューする中で、私はとくに経済活動の言説的な秩序化およびその文化的物質化に関わるいくつかの諸問題に注意が向かうよう合図してきた。続く各章はこうした強調に対する批判的分析と、より永く時間を費やすべきだったもっと別の経済地理学の再構成の方法を提供している (とくに、アレンおよびギブソン・グラハム。またワッツの章における、権力・差異・想像力に関する議論は、どちらかといえばそれとなくはここでの私の議論にそれとなく影を落としている)。

もちろん、その他にも解決していない問題がある。それは私が提唱してきた文化-経済地理学はどのようなものになるのか、そしてそれらに関して何が経済的なものとしてあるのかということである。以下の章はこのことに関する事例とより一般的な内省を結びつけている。私としては、示差的な主題やアプローチや内的論理によって、経済的なものを定義することに確信を持ってない。この3つの問題点全てにおいては、経済の諸問題がほかの多数の地理学と必然的かつ徹底的にからまっている。その代わりに、経済地理学の価値は、その方法論や概念と同じく、おそらくはその動機づけにあるのである。すなわち、生産、流通、消費の差異化された空間、場所、実践、そしてそれらの中や間から引き出される

余剰の形式の理解を強調することにあるのだ。こうした空間・場所・実践は決して純粋に経済的なものではないし、ましてやそれらが生産する余剰でもない。しかし、必然の意味が何で、どこでそれらが生じ、さらにそうした中で生産、流通、消費されるモノが何であるのか、まさにこういったことを手がかりにして、きわめて重要な経済的契機—生産 (その最も広い意味での)、流通、消費—やその調整の研究に取り組むことこそが、経済地理学が誇ることのできる仕組みなのである。

注

- 1) 本書は (Re)Constituting Economic Geographies, (Re)Thinking Globalization, New Geographies of Uneven Development の3つのセクションから成り立っている。本稿はこのうちの最初のセクションのイントロダクションとなっている。長くなるが本文中で言及されるものもあるため、このセクションに収められた論考のタイトルと著者を以下に示す。
 - 1.The Dialectic of Culture and Economy (Andrew Sayer).
 - 2.Economic/Non-economic (Doreen Massey).
 - 3.The Cultural Production of Economic Forms (Richard Peet).
 - 4.The Invention of Regional Culture (Meric S. Gertler).
 - 5.Economies of Power and Space (John Allen).
 - 6.Nature as Artifice, Nature as Artefact: Development, Environment and Modernity in the Late Twentieth Century (Michael J. Watts and James McCarthy).
 - 7.Re-placing Class in Economic Geographies: Possibilities for a New Class Politics (J.K. Gibson-Graham).
 - 8.Local Politics, Anti-essentialism and Economic Geography (Joe Painter).
 - 9.Rethinking Restructuring: Embodiment, Agency and Identity in Organizational Change (Susan Halford and Mike Savage).
 - 10.A Tale of Two Cities? Embedded Organizations and Embodied Workers in the City of London (Linda M. McDowell).
- 2) 道徳性、精神性など価値を含まなざしをとおした地理学的諸研究。
- 3) イギリスのシェフィールド大学内にある世界的に有名な放射光施設。
- 4) 特定分野に特化した専門知識データベースを元に推論を

行ない、その分野の専門家に近い判断をくだすことができる人工知能(AI)システム。

文献

- Bell, D. 1973. *The coming of post-industrial society*. New York: Basic Books. (内田忠夫訳. 1975『脱工業社会の到来 上・下』ダイヤモンド社)
- Bell, D. 1979. *The cultural contradictions of capitalism*, 2nd edition. London : Heinemann. (林 雄二郎訳. 1975-1977.『資本主義の文化的矛盾 上・中・下』講談社)
- Barnes, T. J. 1992. Reading the texts of theoretical economic geography: the role of physical and biological metaphors. In Barnes, T. J. and Duncan, J.S. (eds), *Writing worlds: discourse, text and metaphor in the representation of landscape*. London: Routledge, 118-135.
- Bernstein, J. M. 1991. Introduction. In Adorno, T. W. *The culture Industry: selected essays on mass culture*. London: Routledge, 1-25.
- Bourdieu, P. 1984. *Distinction : A social critique of the judgment of taste*. London : Routledge & Kegan Paul. (石井洋二郎訳. 1990『ディスタクシオン社会的判断力批判 (1)・(2)』藤原書店)
- Bourdieu, P. 1993. *The field of cultural production: essays on art and literature*. Cambridge: Polity.
- Buck- Morss, S. 1989. *The dialectics of seeing : Walter Benjamin and the Arcade Project*. London: MIT Press.
- Chaney, D. 1994. *The cultural turn : scene setting essays on contemporary cultural history*, London : Routledge.
- Clarke, J. 1991. *The American way : processes of class and cultural formation*. In *New times and old enemies : essays on cultural studies and Americana*. London : Harper Collins, 42-72.
- Committee of the Social and Cultural Geography Study Group 1991. De-limiting human geography : new social and cultural perspectives. In Philo, C. (ed.) , *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography*. Department of geography, St David's University College Lampeter.
- Cook and Crang, P.
- Crang, P. 1994a. It's showtime: on the workplace geographies of display in a restaurant in southeast England. *Environment and planning D: Society and Space* 12, 675-704.
- Crang, P. 1994b. Teaching economic geography : some thoughts on curriculum content. *Journal of Geography in Higher Education* 18, 106-113.
- Crang, P. 1996.
- Crang, P. 1997. Performing the tourist product. In Rojek, C. and Urry, J. (eds), *Touring cultures*. London: Routledge.
- Deusche, R. 1991. Boys town. *Environment and Planning D: Society and Space* 9, 5-30.
- Drew, P. and Heritage, J. (eds), 1992. *Talk at work: interaction in institutional settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- du Gay, P. 1996. *Consumption and identity at work*. London: Sage.
- Duncan, J. S. 1994. After the civil war : reconstructing cultural geography as 'heterotopia'. In Foote, K. E. , Hugill, P. J. Mathewson, K. and Smith, J. M. (eds) , *Re-reading cultural geography*. Austin : University of Texas Press, 401-408.
- Featherstone, M. 1995a. The autonomization of the cultural sphere. In *Undoing culture: globalization, postmodernism and identity*. London : Sage, 15-33.
- Featherstone, M. 1995b. The heroic life and everyday life. In *Undoing culture: globalization, postmodernism and identity*. London : Sage, 54-71.
- Featherstone, M., Lash, S. and Robeston, R. (eds) 1995. *Global modernities*. London : Sage.
- Friedman, J. 1994. *Cultural identity and global process*. London : Sage.
- Gendron, B. 1986. Theodor Adorno meets The Cadillacs. In Modleski, T. (ed.) *Studies in entertainment: critical approaches to mass culture*. Bloomington: Indiana University Press 18-36.
- Godelier, M. 1986. *The mental and the material : thought, economy and society*. London : Verso. (山内昶訳. 1986『観念と物質 : 思考・経済・社会』法政大学出版会)
- Granovetter, M. 1985. Economic action and social structure : the problem of embeddedness. *American Journal of Sociology* 91 481-510.
- Gudeman, S. 1986. *Economics as culture: models and metaphors of livelihood*. London: Routledge& Kegan Paul.
- Harbermas, J. 1978. *Knowledge and human interests*, 2nd edition. London : Heinemann. (奥山次良他訳. 1981『認識と関心』未来社)
- Harvey, D. 1989a. *The condition of postmodernity : an enquiry into the origins of cultural change*. Oxford : Blackwell. (吉原直樹訳. 1999『ポストモダンニティの条件』青木書店)
- Hochschild, A. 1983. *The managed heart: commercialization of human feeling*. Berkeley: University of California Press.

- Honneth, A. 1986. The fragmented world of symbolic form: reflections on Pierre Bourdieu's sociology of culture. *Theory, Culture and Society* 3 55-66.
- Johnson, R. 1993. Editor's introduction : Pierre Bourdieu on art, literature and culture. In Bourdieu, P. *The field of cultural production: essays on art and literature*. Cambridge: Polity, 1-25.
- Lash, S. and Urry, J. 1994. *Economies of signs and space: after organized capitalism*. London: Sage.
- Law, J. 1994. *Organising Modernity*. Oxford : Blackwell.
- Leidner, R. 1993. *Fast food, fast talk*. Berkley: University of California Press.
- McCloskey, D. 1988. The consequences of rhetoric. In Klamer, A., McCloskey, D. and Solow, R. (eds) , *The consequences of economic rhetoric*. Cambridge: Cambridge University Press, 280-290.
- McDowell, L. 1995. Body work: heterosexual gender performances in City workplaces. In Bell, D. and Valentine, G. (eds), *Mapping desire: geographies of sexualities*. London: Routledge, 75-95.
- Marcus, G. 1989. *Lipstick traces: a secret history of the twentieth century*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Marsden, T. and Wrigley, N. 1995. Regulation, retailing and consumption. *Environment and Planning A* 27,1899-1912.
- Massey, D. 1991. Flexible sexism. *Environment and Planning D : Society and Space* 9, 31-57.
- Miller, D. 1992. The young and the restless in Trinidad: a case of the local and the global in mass consumption. In Silverstone, R. and Hirsch, E. (eds), *Consuming technologies: media and information in domestic spaces*. London: Routledge, 163-182.
- Miller, D. 1995. Consumption as the vanguard of history: a polemic by way of an introduction. In Miller, D. (ed.) *Acknowledging consumption: a review of new studies*. London: Routledge, 1-57.
- Morris, M. 1992. The man in the mirror: David Harvey's 'condition' of postmodernity. *Theory, culture and Society* 9 253-279.
- Orans, M. 1968. Maximising in Jajmaniland. *American Anthropologist* 70 875-897.
- Palmer, B. 1990. *Decent into discourse : the reification of language and the writing of social history*. Philadelphia : Temple University Press.
- Philo, C. (ed) , 1991. *New words, new worlds : reconceptualising social and cultural geography*. Department of geography, St David's University College Lampeter.
- Prattis, J. I. 1987. Alternative views of economy in economic anthropology. In Clammer, J. (ed.), *Beyond the new economic anthropology*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Ritzer, G. 1993. *The McDonaldization of Society*. Thousand Oaks, CA: Pine Forge Press. (正岡 寛司 訳.1999 『マクドナルド化する社会』 早稲田大学出版部)
- Rose, N. 1990. *Governing the soul: the shaping of the private self*. London: Routledge.
- Sayer, A. 1994. Cultural studies and ' the economy, stupid', *Environment and Planning D : Society and Space* 12, 635-637.
- Sayer, A. and Walker, R. 1992. *The new social economy : reworking the division of labor*. Oxford : Blackwell.
- Shumer – Smith, P. and Hannam, K. 1994. *Worlds of desire, realms of power : a cultural geography*. London: Arnold.
- Thomas, N. 1991. *Entangled objects: exchange, material culture and colonialism in the Pacific*. London: Harvard University Press.
- Thrift, N. 1991. over wordy worlds? Thoughts and worries. In Philo, C. (ed.) , *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography*. Department of geography, St David's University College Lampeter.
- Ventola, E. 1987. *The structure of social interaction: a systematic approach to the semiotic of service encounters*. London: Pinter.
- Williams, R. 1981. *Culture*. Glasgow: Fontana. (小池民男 訳. 1985 『文化とは?』 晶文社)
- Williams, R. 1983. *Keywords : a vocabulary of culture and society, revised edition*, Glasgow : Fontana. (権名 美智他訳. 2002 『キーワード辞典』 平凡社)
- Wills, S. 1991. Work(ing) out. In *A primer for daily life*. London : Routledge, 62-85.
- Young, R. 1995. Culture and the history of difference. In *Colonial desire: hybridity in theory, culture and race*. London: Routledge, 29-54.
- Zukin, S. and DiMaggio, P. 1990. Introduction. In Zukin, S. and DiMaggio, P. (eds), *Structures of capital: the social organization of the economy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1-36.

付記

訳出にあたり中川正氏（三重大学）と大城直樹氏（神戸大学）にお世話になりました。心より感謝申し上げます。